

ISSN 1883-7409 (print)  
ISSN 1884-0183 (on-line)



*Outside the Box:  
The Tsukuba Multi-  
Lingual Forum*

Volume 4, Issue 1

Autumn, 2011

Foreign Language Center

Tsukuba University

Japan

## *Special Section: Discussing Geopolitics*

- **Prologue: The Origins of Geopolitical Thinking** 7  
Christian W. Spang
- **An Introduction to Early 20th Century Geopolitics** 8  
Christian W. Spang and Igor Milovanovic
- **The Pivot Moves Eastward: Mackinder and the Okinawa Problem** 18  
Naoto Aizawa and Christian W. Spang
- **Civilizations in International Relations: Huntington's Theory of Conflict** 24  
Nurlan Tussupov, Christian W. Spang, and Kuanish Beisenov

## *Theory and Other Dangerous Things*

- **Pragmatic Translation Choices Using Etsuo Iijima's "On the Concept of the Universal Ki-energy"** 33  
Jeroen Bode
- **Loanword Associations and Process** 37  
John P. Racine

## *Teaching Tips & Techniques*

- **The Language of Young People and its Implications for Teaching** 46  
Sachiho Mori
- **Teaching Creative Writing in an ESL Context** 50  
Simon Kenny
- **Collaboration Using Sentence Strips** 55  
Marshall Hughes

## *Around the World*

- **Travel Outside The Box** 60  
Shinichi Nagata
- **Bangkok – The City Beyond Belief** 64  
Pariyapa Amornwanichsarn

## *Creative Writing*

- **Snow, Snow, Snow** 69  
Yuka Nishimura



# *Teaching Tips and Techniques*

# The Language of Young People and Its Implications for Teaching

Sachiho Mori

Aoyama Gakuin University

**Abstract:** 若者言葉の中には非文法と見なされる表現が多い反面、その数は単に誤用とみなせられないほど増えている。本稿では日本人大学生のスピーチデータを基に、若者言葉を言語学的に観察し、「変わりつつある日本語」をどのように日本語教育に取り入れていったらよいかを考察する。

While it has sometimes been noted that the Japanese language of the youth contains a number of “ungrammatical” expressions from a prescriptive point of view, the high frequency such language use in recent years calls for another look of at the new trend. In this paper we will present a linguistic analysis of natural speech by college students. Based on the speech data, we consider how the changing nature of the language should be dealt with and might be incorporated in language teaching.

## 研究の目的

若者言葉が諸々の分野で注目されている。(社会)言語学、言語教育の観点から見て「変わりつつある日本語」は、言語学研究や日本語教育に携わっている者にとってこれからますます考えていくべき数多くの問題点が提起される。特に若者言葉の中で従来の文法的な表現に反するものは、非文法的としてその存在と使用を排除する態度を持つべきなのか、それとも「言語の変遷・ゆれ」として認めるべきなのか、非常に難しい問題である。例えば、形容詞を修飾する副詞の「すごく」が、最近では「すごいいい」、「すごいおもしろい」のように形容詞形の「すごい」に代用されている。これらの非文法的表現は単に誤用とみなせられないほど頻度が高くなっていて、日本語教育では学習者にこのような表現を導入すべきか、またどのように導入すべきかの問題を注意深く検討しなければならない。本研究では日本人大学生のスピーチデータの中に現れる「すごい・すごく」の例を基に、若者言葉の現状を言語学的に観察し、日本語教育にもたらす課題を考察する。

## 調査方法

本研究では、大学生のスピーチデータを基に「すごい・すごく」の使用数と言語学的環境を観察した。スピーチデータは、2008年度春学期に東京都内の大学一年生31人(男子学生11人、女子学生20人)の各3分間スピーチを録音し文字化したものである。スピーチトピックは、「とっておきの情報」である。スピーチの文字化は、スピーチをした学生本人が行った。文字化の目的は、学生自身で録音したスピーチを聞いて一語一句書き出し、非文法、語彙、不必要な言葉、不適切な表現を添削することにより、言葉の間違いや話し方の癖に気付かせることであった。

## 結果

「すごい・すごく」を使用していた人数は、31人中17人であり、半数以上の学生が「すごい・すごく」をスピーチに使用していることがわかる。「すごい」の使用数は39回で、男子学生が11回、女子学生が28回であった。一方、「すごく」の使用数は10回で、男子学生は使用しておらず、女子学生が10回使用しており、女子学生の方が男子学生より「すごい」「すごく」共に多く使用していた。また、「すごい」の方が「すごく」より使用数が多かった。特に、17人中15人が「すごい大変」のように「すごい」を

Mori, S. (2011). The language of young people and its implications for teaching. *OTB Forum*, 4(1), 46-49.

副詞的に使用しており、「すごく」を副詞的に「すごい」を形容詞的に使用していた人数は、17人中2人のみであった。「すごい」で修飾している品詞は、形容詞が19回、名詞13回、動詞7回、形容動詞5回、副詞1回で、「すごいおいしくて」「すごい恥ずかしい」など、形容詞の修飾が多くみられた。また、「すごい」で修飾している表現は、肯定的な句が25回、否定的な句が13回、中性的な句が9回であり、「すごい人気」「すごいかわいい」など、肯定的な内容の句を多く修飾していた。このように、本研究の大学生は半数以上が「すごい・すごく」をスピーチに使用しており、さらに、差はあるものの、性別、修飾する品詞、表現の違いに関らず、頻繁に「すごい」を副詞的に使用していることが明らかとなった。実際のスピーチ例を以下に示す。

その時よりすごい印象に残っているのが、だいたい一日10時間くらいチラシ折をずっとやっててすごい次の日筋肉痛になるほどすごい大変だったんですけど、前日にあのチラシ折をあの日産スタジアムでやったときには、リハーサルをしている声が聞こえてきてすごい貴重な体験ができました。(スピーチデータ 女子学生1)

この国は毎回すごい、一年に何回も通貨を発行してるんですよ。だからすごいおかしな国で、なんかものの値段がすごい何億とかで、買い物とか行く時に、その国の人たちは買い物に行く時に札束を入れたバックで行くっていうなんかすごい変な国なんですよ。(スピーチデータ 男子学生1)

そして、オーディションはすごく内容が濃くて午前から午後にかけて一日中で、私が受ける年は例年の約3倍くらいの倍率で、すごい人気で大変だったんですけど、あと英語の会話とか作文とかもすごいやらされて行ったらもうすごいポストカードのように青くってあと、地元の中学校へ行ったら、すごい高校生とかも20歳を超えたようなすごいオトナで私達中学生だったのに小学生みたいなこといわ

れて、すごいそういうのとかも感じさせられて、すごい毎日が驚きで、すごいよい経験をしたんですけど、もうすごい大きいなんだろう経験でした。(スピーチデータ 女子学生2)

## 考察

以上のように、現在の大学生のスピーチを観察すると、「すごい」と「すごく」がほぼ free variation として使用されていることがわかる。このような「すごい」の用法は、歴史的変化を経て今の用法に至っていると考えられる。このことは似たような表現の「えらい・えらう」の例からも推測される。「えらう」は、元々「えらう美しい」のように用言を修飾していたが、寛政頃から「えらう」に変わって「えらい」の形で用言を修飾する用法が現れ、幕末頃には「えらい美しい」のように用言を修飾する「えらい」の頻度が「えらう」より高くなったことが明らかとなっている(増井 1987)。また、副詞的「すごい」の使用は、本研究での大学生のスピーチに頻繁に見られたように、若者に顕著に見られるようだが、一方必ずしも若者に限られているわけではないようである。例えば、野坂昭如が「ものすごいまずい」、曾野綾子が「すごい立派な干菓子」と書いているように文学界でも著名な作家達がかなり使用している(北原 2004)。つまり、「すごい」の副詞的用法は言語学的に言って、歴史的変化を経て今の用法に至っていると考えられ、若者の中で顕著に現れるのはその結果なのではないだろうか。さらに、形容詞の「すごい」に関しては、intensifier としての役割が重要であることが考えられる。というのは、どの形容詞でも同じように副詞的に使えるというわけではないからである。例えば、「美味しく/\*美味しい召し上がってください」や「楽しく/\*楽しい遊ぶ」などからこのことは明らかである。また、「えらい・えらう」も intensifier として使用されていたことからこのことが言えるだろう。

このように、歴史的事実においても、また現在の日本語話者の言葉を観察してみても、「すごい」が *intensifier* として使われる場合は「すごい」が「すごく」とほぼ *free variation* のように使われていることがわかる。しかし、日本語教育で使用されている日本語教科書では、「すごい人」、「すごいですね。」のように「すごい」を形容詞または形容詞の述語とする一方、「すごく楽しかったです。」のように「すごく」を副詞として導入している。つまり、述語以外の場合は「すごく」を使うという文法的な「すごい・すごく」の説明のみしかない (Banno, Ohno, Sakane, Shinagawa, & Takashiki, 1999; Jorden & Noda, 1987; Miura & McGloin, 1994; Nagara, et al., 1990; The Association for Japanese Language Teaching, 2007; 小池真理他 2007; スリーエーネットワーク 1998; 名古屋YMCA教材作成グループ 2004; 凡人社教科書委員会 2002; 水谷信子 1987)。そこで、日本語教育ではどのようにこの副詞的用法の「すごい」を扱ったらよいのかを考えると、まず日本語のスピーチスタイルとの関係を考える必要があるのではないだろうか。副詞的「すごい」はスピーチなど口語的な文脈で特に感情をこめたものには使用できるが、新聞や学術論文では使用しないであろう。そのため日本語のスピーチスタイルとの関係を示した上で、日本語教科書のダイアログ例や文法説明で「すごい」と「すごく」を導入していくべきなのではないかと考える。このように若者言葉の中に現れる非文法的なものは、その存在と使用を完全に排除するのではなく、「言葉の変遷」としてとらえ、その言葉が持つ性質（「すごい・すごく」とスピーチスタイルとの関係）と日本語学習者の学習目的（サバイバル日本語を学習したいのか、ビジネス日本語を学習したいのかなど）を注意深く検討した上で、日本語教育に取り入れていったらよいのではないだろうか

## 今後の課題

今後、スピーチデータの量を増やし、また自然会話でも調査を行うこと、さらに幅広い年齢層のデータを調査し研究を広げる必要がある。また、英語の口語的表現 (*real good, awful nice* など) でも同じような現象があることも念頭に置き、英語教育と日本語の研究結果を比較していきたい。そして、その研究結果を踏まえ「変わりつつある日本語」をどのように日本語教育に取り入れていったらよいのかを考えていきたい。

## 参考文献

- Banno, E., Ohno, Y., Sakane, Y., Shinagawa, C., & Takashiki, K. (1999). *Genki II: An integrated course in elementary Japanese*. Tokyo: The Japan Times.
- Jorden, E. H., & Noda, M. (1987). *Japanese: The spoken language, part 1*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Miura, A., & McGloin, H. N. (1994). *An integrated approach to intermediate Japanese*. Tokyo: The Japan Times.
- Nagara, S. et. al. (1990). *Japanese for everyone*. Tokyo: Gakken.
- The Association for Japanese Language Teaching. (2007). *Japanese for Busy People II*. (Revised 3rd ed.) Tokyo: Kodansha.
- 北原保雄編 (2004). 『問題な日本語』大修館
- 小池真理他 (2007). 『聞く・考える・話す 留学生のための初級にほんご会話』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (1998). 『みんなの日本語 I』スリーエーネットワーク
- 名古屋YMCA教材作成グループ (2004). 『中級レベルわかって使える日本語』スリーエーネットワーク
- 凡人社教科書委員会 (2002). 『初級語学留学生のための日本語 I』凡人社

増井典夫 (1987). 「形容詞終止連体形の副詞的用法—「えらい」「おそろしい」を中心に」 『国語学研究』 27, 77-86.

水谷信子 (1987). 『総合日本語中級』 凡人社

**About the author:** Sachiho Mori is currently an instructor at Aoyama Gakuin University, where she teaches Japanese language.